

南方(比島)

戦友の命を救った岩塩

山形県 荒川喜一

大正十(一九二一)年十二月山形県最上郡戸沢村名高で、兄弟五人の末っ子で生まれました。

戸沢村立尋常高等小学校の高等科二年を卒業し、樺太の名好郡塔路町で電車の修理工として働きながら、この青年学校に入学、軍事訓練及び一般教育を受けました。

徴兵検査は本籍地の戸沢村に帰って受け、見事に甲種合格となり、昭和十八(一九四三)年一月十五日、入隊のため福岡県の中央グラウンドに集合し、一月二十五日、下関港を出港、朝鮮の釜山

港に上陸しました。我々は、一月二十八日、満州国東安省勃利にあつた戦車第二師団派遣で、同工兵隊第一二一〇五部隊に配属となりました。

この部隊では、中隊員の電工助手として、戦車や自動車等の電気部門の修理、補修などの作業を多く担当していました。このことは樺太での電車修理の経験が買われたものと思います。

昭和十九年八月八日、勃利を出発し、十日に鮮満国境を通過、南陽、水口浦、潼関、鐘城、上三峰、などの各駅を通過して釜山港に向かいました。

そして乗船、二十一日に釜山港を出港し沖合いに出ると、既に大船団が組まれていました。

これまでの部隊の輸送船団は、兵員、武器、食糧などを、船ごとに分けて船積みされてきました

が、これでは敵潜の攻撃により一つの船がやられると、部隊のある部分が欠落して、部隊全体の機能が失われます。このため、私たちの部隊輸送に組まれた船団は、歩兵、工兵、砲兵、輜重兵などはそれぞれに武器、弾薬、食糧を持ち、一つの船だけが残って上陸しても、武器、弾薬があり、すぐ戦闘を行えるように組まれた船団になりました。

船団が台湾沖にきますと、敵潜の攻撃を受け、何隻かの輸送船が沈没し、多くの戦死者、水没者が出ました。我々は約半月ほどは、その救助や救護などの作業に当たりました。

昭和十九年九月、フィリピン島サンフェルナンドに上陸しましたが、そのころは、戦車があっても燃料がなく、飛行機があればガソリンがないという有様で、もちろん、食糧の補給はなく、やられた飛行機、戦車、貨車等を焼却、谷底に捨てたり、戦場の後始末のような作業となりました。

そのころ、中隊は各小隊に分かれ、小隊はさらに分隊に分かれ、小人数での行動をしながら、敵

機の発見を回避し、機銃掃射による被害を最小限度に食い止める、という方法を探っていました。

また、そのころになりますと、食糧の補給は全く途絶し、食べられそうな青草、野草を食べるか生き延びる方法がなく、兵たちはだんだん体調を崩し、青草も食べられなくなった兵士は、戦闘の前に次々息絶えてゆきました。

かくして広く散開していたお陰か、敵弾による戦死者は少なく、大部分の兵士は、飢え死にすることになりました。私は、田舎育ちのためか、不思議と、このような逆境に強く、青草暮らしに耐え、比較的元気を保っていました。

あるときのことですが、森の端の海岸に突き出た岩に岩塩の層を発見し、それを持ち帰って戦友に分けたところ、これが多くの戦友の命を救うこととなりました。

そうしているうちに、山野に伏して隠れている我々の頭上に、米軍機がたくさん宣伝ビラを撒き散らしました。それには「日本は降伏したので、

山を降りて出てきなさい」と書かれており、敵の宣伝やデマだと思い、誰も信用しませんでした。

昭和二十年八月十五日、サラクサク峠アンチポ一口で終戦となりました。そして、その後、師団長命により「日本は降伏したこと。日本はこの戦いに負けたこと。したがって兵器を敵側に引き渡すこと」となりました。

このとき、我々の小銃には弾丸は一発もなく、ただ自決用の手榴弾が一個あるのみでした。そして銃を米兵に手渡すと、敵さんは帯剣と一緒に簡単に谷底に向かって投げ飛ばすだけでした。

そして着ている衣服は全部脱がされたので、我々はこれを最後に、皆殺しにされるのでは、と話し合っていたものです。そして頭から消毒薬と思われる白い粉を浴びせられました。

それがすむと、一番先にパンツを渡され、次いで歯ブラシ、石鹸をもらいました。熱帯地方ですから裸でも風邪を引く心配はありません。体をきれいにしろということなのでしょう、我々はこれ

で殺される心配はないと思いました。さらにジュース、パン、米軍用の大きな靴、シャツには「PW」のマークの入った捕虜用のものなどの支給を受けました。

そしてトラックに載せられ、ポンドック半島の収容所に入りますと、既に、ここにはテレビがありました。収容所では物資の運搬作業や倉庫内の整理・整頓、建物の補強、修理作業、草取りなどをさせられました。

こうして連日の暑さの中での体力の維持には、体操を行い、夜具用に毛布一枚が支給されました。降伏前は、野戦では谷や沢水で体を拭う程度でしたが、米軍の収容所ではシャワーがありました。食事は、入所当座は、やわらかいおかゆが支給されましたが、体力の回復につれて、腹いっぱいとはいえませんでした。徐々に米飯らしく固い食事になりました。

体調も整い、元気を取り戻したころになりますと、今度は現地人による顔実験、首実験が始まり

ました。それに引っ掛かった人は残されて、その後の消息は分かっておりません。誠に気の毒で残念なことであったと思います。

フィリピンに渡った戦車第二師団「撃」第一二一〇五部隊は、戦争末期の昭和二十年一月、米軍のリングエン湾上陸に際して、ルソンの山野に展開したものの、ついには持久戦となり、多くの在留邦人の生命を守りつつ、優勢な敵の進撃を阻止、最後の一兵にいたるまで戦いました。

特にサラクサク峠付近の戦闘では、多くの日本兵が、この山野に肉弾となつて散華しました。これは食糧の補給もないままの飢えと、敵機の空からの銃撃、それに艦砲射撃の鉄の嵐によるものでした。

この激戦について第十四方面軍司令官山下奉文大将は、その働きを高く評価して、戦車第二師団並びに配属部隊に対して感状を付与され、その偉功を賞賛されました。また、この地で散華された多くの英霊に対して慰霊の碑が建てられておりま

す。

昭和二十一年十一月二十日ごろ、現地で乗船、十二月一日、名古屋港に上陸しました。名古屋では謝金として八十円の支給がありました。そうして名古屋からの帰途、多くの日本人たちに会いましたが、誰からも「ご苦労さん」の声一つありませんでした。

こうして十二月三日に我が家に帰り着くことができましたが、山形駅からは先に行く列車がなく、駅前の旅館に泊まりました。食事抜きで二十円、余りの高さに驚きました。

家に着くや、両親は元気な姿で迎えてくれました。家族にとっては、出征以来、今まで何の消息もなく、「喜一は戦死したもの」との思いの中、私の帰った姿を見て、一同、涙、涙で出迎えてくれました。

家は父も兄弟もみな大工職ですので、私も大工として生計を立て、今日まで努力してきました。